



**BUHICH**  
ブヒッチ



とある女性死神の霊圧が

現世で感知できなくなつた、と

尸魂界からの連絡を受け

消息を絶つた場所を

調査することになつた四楓院夜一、

そこはとある学校だつた…

虚もしくは破面の仕業の可能性もあり

周囲の環境への影響も考え、刺激しないよう

その学校の生徒に混じり調査を開始した。



「やれやれ…面倒じやのう…」

わざわざいこのような格好までせねばならんとは…」

「ただ、この学校に漂う霊圧の残滓…これは…」

死神でも滅却師でもない…虚の…」





夜一は消息を絶った死神のかすかな霊圧をたどり  
校内でも人気のない場所へとたどり着いた…

「このあたりで霊圧の消失が確認されたのじやが…

……ツツー！」





「ぶっ……これは……一体……意識が……」

突然、何者かの手で夜一は意識を奪われた  
それはまるで穿点と呼ばれる麻酔の一種を  
使われたかのようだ……





「うひひひ……また上物の女が手に入ってたぞ！」

死神という連中は皆、義骸という人形に入るようだからそれを完現術すれば簡単に操り人形になっちまう！

全く便利な能力だ！うひひひ！」

意識を失い廊下に倒れた夜一を見下ろし

にやけ顔の男は言った。

夜一の意識を奪ったのは、

この学校に用務員として勤め普段は

あまり目立つことのない冴えない中年男だが

唯一、他人とは大きく違う点があり、

それは、完現術という能力を持っているという点だ。



——その夜、昼の内に用務室に運んできていた夜一を  
用意していた衣装に着替えさせ、男は今から始める『行為』に  
ワクワクしながら完現術を使い夜一の意識を戻した。

「さーて！四楓院夜一だったな……！」

わざわざ学生証まで用意しているとは  
死神って連中は細かいな……

目を覚ませ！夜一！」



「……ん……いっいは……一体……！」

「……ッ！……なんじゃー！……この格好は……ッ！」

「うひひひー！良く似合ってるぞ夜二♡」

「……ッ！お……お主ー！何者じゃッ！」

「……ッ！一体、儂に何をしおった！」





「なん……じゃと……！」

お主が……完現術で……！」

男から今までのことを聞き、夜一は油断していたこと、義骸で来てしまったことを悔やんだが、

それでもどうにか今の状況を切り抜けることを考えていた。

——しかし、義骸を操ることのできる男の優位は

決して揺るがず、夜一のその男ならば劣情を抱かずには  
いられない身体を使い自らの淫らな欲望を

叶えようとしていた……





「では早速……♡

夜一ちゃんのせいでも、ビンビンになったこのいつを  
口で気持ち良くしてもらおうかな♡  
思いつきり下品にしゃぶるんだぞ♡」

男は自らのズボンを脱ぎ捨て、夜一に向かって  
いきり勃つたペニスを指してフェラを促した。

「——ッな！なんじやとー！

たわけが！そんなこと……するわけが……

……ッ！……なん……じやと……身体が……勝手にッ！

イ……イヤじや……！やめ……やめろおお！」





んぼお♡

「んっぼおおお——ッ！  
か…身体が…勝手に…チンポを  
しゃぶってしまっう！」

「じゅぼッ…じゅぼッ！

んほお！貴様…！

決してゆりゆさぬッ！

んぼおッ！んぼおお！」

んぼお♡

「じゅるんッ…じゅぼおッ！

儂の…じゅぼッ！かりやだ…がッ！

自由に…んぼッんぼッ！なったりや

覚えて…んぼおッ！いるのじゃぞ…ッ！」

んぼお♡

んぼお♡



んぼおっ♡



「…やれやれ！」

まだ抵抗できてるのか

じゃあフエラに集中できてるように

してやろう！」

「夜ー！豚になれ！」

ぬっ♡  
んぼおっ♡



んぼおっ♡



ぬっ♡  
んぼおっ♡





おぼおお

「ブヒィッ♡ブヒィ…  
フゴおー!ブヒィィーッ♡  
チンポおッー!ぶひッー!」

「♡♡♡♡♡♡♡♡♡  
や…やめ…ブヒィィ♡  
フゴッ♡フン♡おな♡」

んっお  
んっお  
おおお…

「ザーメンッ♡ブヒィ♡  
チンポ汁♡ブヒィーッ♡  
ブヒィ♡ブヒィ♡  
んっぼおおお——ッ♡」

んっお

んっお





よるいち



# BUHICH

ブヒチ

～乱華 屈辱の淫道・屁煙遁～





前回の夜一への口辱は明け方まで続き  
いつの間にか夜一は気を失ってしまっていた…

気が付いたころには、外は夕刻を過ぎて日が落ち  
また、男の欲望を満たす時刻になっていた。

並の人間であれば、あれだけの望まぬ屈辱、  
女性としての尊厳を踏みにじるような行為に  
絶望し、心に大きな闇を抱えてしまふところだが、  
尸魂界の護廷隊長と隠密機動総司令官を兼任し、  
四大貴族と謳われる四楓院家の元当主でもある  
夜一は未だに反撃の機会を伺っていた…



「……む……！」  
どうやら気を失っていたようじゃな  
チツ…思い出しただけでも胸くそ悪い  
かつては「瞬神」とも呼ばれたこの儂が…  
完全に油断しておった……なんとかこの状況を  
打開せねば……」

「うひひひ…目が覚めたようだね！夜一ちゃん♡  
隙をうかがっているようだけど僕の能力は  
絶対に破れないのさ」

「…フン、ようは貴様は能力に頼らねば、  
女を好きに扱えぬ腑抜けじゃというのか！」

「こんな状況でも気丈にふるまうなんて本当に  
夜一ちゃんはカワイイなあ♡  
ただ、残念だけど今夜の【調教】で少し素直に  
してあげるからね♡」

「…ツ！（調教…じゃと…！まさか昨日よりも  
むづかしいことをするといふのか…ツ！）」





——コンコン

——突然、二人のいる部屋のドアがノックされ……

「……失礼します。ただいま戻りました……。」

という女性の声とともにドアが開いた。

夜一は予期せぬ突然の訪問者に驚くが、

それも一瞬、自らの無様な姿を誰かに見られぬよう身を隠そうとしたが、訪問者の姿を目にした途端、夜一の動きが止まる。

それは決して男の能力によるものではなく単純に驚きから来るものだった。

「……な……！」

「お、お主は……ッ！」





「乱菊……！松本乱菊か……ツ！」

「あ、あなたは……！夜……さん……！  
どうしてここに……？  
それに……その格好……」

「……この格好はその男に命ぜられ……仕方なく……  
それよりもお主は現世で行方をくらましましたと  
聞いておったぞ！  
儂はお主を探し霊圧をたどりこの学校まで  
きたのじゃ。お主……このような場所でなにを……」

「うひひひ……全て僕の計画通り♡  
乱菊も夜……ちゃんも僕の罠にはまったのさ！」

よるいち



——数週間前、乱菊は尸魂界の命を受け  
現世での不穏な霊圧を調査していた。

周田の環境への影響も考え夜一と同じように  
義骸に入り活動していたのだが、運悪くこの男に  
目を付けられてしまい凌辱されてしまう…

身体を操られ、尸魂界のことや死神のことなど  
洗いざらい告白し、男の操り人形と化していた。

夜一への尸魂界からの調査指令も

全てこの男が仕組み、乱菊を操り行った  
ものだった。

そして現在、技術開発局の面々が虚圏へ検体を  
採取しに行った隙に乱菊を忍び込ませ様々な  
怪しげな器具、薬剤を盗ませ凌辱に用いようと  
考えていた…



——真相を聞き改めて二人は男を軽蔑する

「そ、そんな…夜一さんまで…  
なんて下衆な男なの…!」

「…なん…じゃと…!」

「うひひひ…じゃあ早速、夜一さんの調教を  
始めよう♡乱菊、いつもの衣装に着替えるんだ!」

「嫌がってもどうせ操って着替えさせるくせに…  
本当にドスケベなクソオヤジだわ…!」





「…ほ、ほら…どうアンタの大好きな  
ドスケベピチピチブルマよ！  
こんな変態衣装を着せて喜ぶなんて、本当に  
どうしようもない男だわ！」

完全に優位に立つ男に対し、強がりにはか  
ならないとはわかっていても、せめて意志だけは  
気丈であろうとする乱菊は侮蔑の言葉を吐くが、  
逆にそれが男の劣情を掻き立ててしまっていた。



「乱菊のために用意したゴールドのブルマ  
キミのドスケベボディにとっても似合ってるよ♡  
乱菊が盗ってきた器具も使おうね♡」



夜一の調教と称した行為が始まると  
乱菊は無様に尻を突き出した  
四つん這いにさせられてしまう…

「…くっッ！」

このヘンタイオヤジ  
こんな格好でい、いつたいたい何を  
させるつもりなの?」

「うひひひ…」

じゃあ今日はお尻で

二人を楽しませてあげるからね♡」

そう言うと男はチューブのついた  
吸盤上の器具を乱菊のゴールドの  
ブルマを片方めくり、剥き出しの  
アナルに張り付けた



「な、なによこれ！」

私のお尻にぴったりとくっついて、最低！本当に最低だわ！」

「乱菊、この間作った『あの術』を

キミには使ってもらおうよ♡」

「なん…ですって…！」

『あの術』を使うなんて

まさかこれからする調教って…！」

『あの術』とは、夜一が捕まる前に

乱菊から聞き出した死神が使う

鬼道という術を、男の変態的な欲望を

満たすために改造した、破道・縛道の

どちらにも属さない『淫道』と名付け

乱菊に習得させていた





よるいち



「…貴様…！」

儂にこのような辱めを…

決して…決して許さぬぞ！」

一方、夜二も乱菊の後ろに

彼女と同様に、尻を突き出した

四つん這いの態勢をとらされ

ていたが、未だに心は折れておらず

反抗の意思を言葉で示していた

「うひひひ…♡夜一ちゃんも

まだまだ反抗的だね♡

これから楽しい調教を始めるけど

そんな夜一ちゃんに免じて

夜が明けるまでに降参しなかったら

キミ達を解放してあげるよ♡」

「なん…じゃと…！」

余程、儂を降参させることができると

思っておるようじゃが…フン！

いいじやろう！後悔するのは貴様じゃぞ！」

よるいち



「んぼおツ……！」

男の挑発に乗ってしまつた夜一は  
奇妙な形のガスマスクを付けられ  
それに繋がるチューブを両鼻に  
突っ込まれ無様な顔にされてしまう

そしてそのチューブを  
あろうことか乱菊の尻に  
装着されたチューブと  
繋ぎ合わせた

「んおおん……！んおおツ！」

（ま、まさかー！こやつ！）

いろいろたい何とらうことを

考えておるのじゃー！」

よるいち



「準備完了♡」

よし！乱菊！あの術を使うんだ！

うひひひ…♡プライドの高い

キミにぴったりの

あの無様な術を！」

「い…嫌よ！」

アンタなんかの…命令に…従う…

もんですか…ツ！」

「さすがは死神の副隊長！

意志の力で僕の能力に逆らう

なんて大したものだね。

じゃあ、能力を強くしていくよ♡」

「あああんツ♡ダメツ♡

嫌あツ…やめてツツ！」

いやあツツ♡出したくないツ！」

ダメツツ♡ダメよ私！」

『あの術』を使つてはダメーツ♡

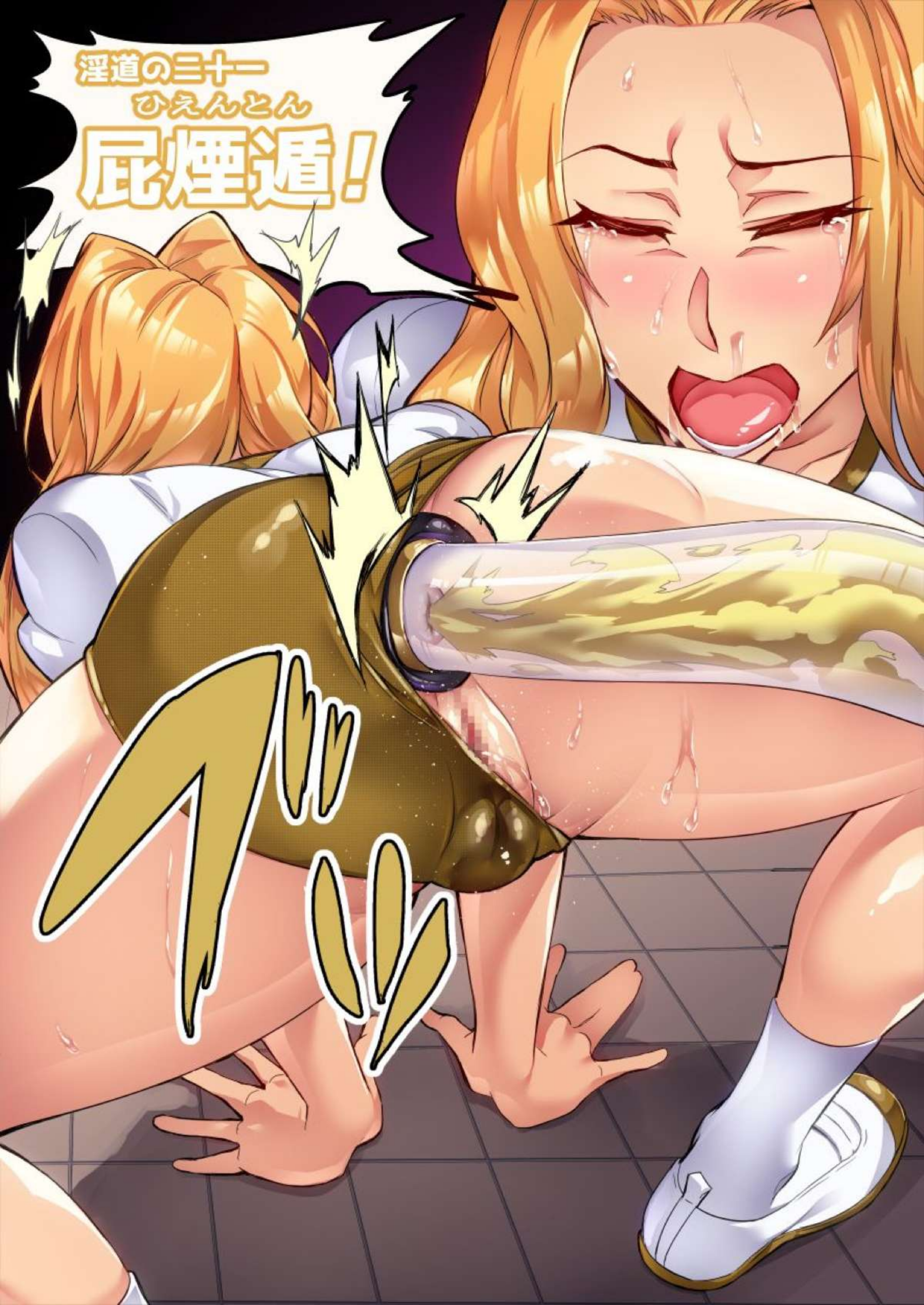
ツで…出る！出ちやう—ツ！」



淫道の三十一

ひえんとん

屁煙遁!





本来は煙幕を発生させる

鬼道、縛道の三十二『赤煙遁』

男はそれを乱菊に淫らに改造させ  
尻から膨大な量の放屁を放たせた

「んぼお——ッ！んぼおッ！

（こやつ！鬼道を…改造しおつたと  
いうのか…ッ！）

乱菊の尻穴から炸裂した淫放屁は  
チューブを伝い夜二へと向かって  
来ていた

「んおおお——ッ！むおおおッ！

く……ッ！くそおッ……！

く……くるなッ！くるなああ！」

よるいち



そして、身体の自由を奪われている  
夜一の必死の抵抗もむなしく、  
チューブを伝い進む淫放屁は  
容赦なく夜一の鼻、口へと流れ込み  
夜一の呼吸を支配した

「おえええツッ！ぼおええええ！」

（んおおおお……ツッ！）

なんつという酷い臭いじゃツッ！

だ、ダメじゃあ！く、臭すぎるツッ……！

くそおツッ！息を止めれば臭いは

防げるが、そ、それでは呼吸が……」

よるいち



淫道の三十一

# 屁煙遁!



「いっイヤアああ——ッ！」

淫道の三十一！屁煙遁！」

ズッ  
ズッ  
ズッ

「やめてッ——！もうやめさせてえ！」

淫道の三十一！屁煙遁！」

「ごめんなさい！夜一さん！」

淫道の三十一！屁煙遁！」

ズッ  
ズッ  
ズッ



「んおおおおお！んぼほおお！」

（だ、ダメじゃあツ……！

もう耐えられぬツ！臭い……！

臭すぎる——ツ！）」

「うひひひ……♡

じゃあさつき言つた通り

夜一ちゃんもお尻を使おうね♡」

「んぼおツ……！んおおお！」

（な、なん……じゃとツ……！

まだ何かするつもりなのかあ……ツ！）」

よるいち



そして、身体の自由を奪われている  
男は夜一の後ろへと周り…  
乱菊と夜一の痴態を見てビンビンに  
そそり勃ったペニスを…

「ふう〜♡ふう〜♡  
夜一ちゃんのお尻♡  
いただきまあ〜す♡」

「んおおお——ッ！むおおおッ！  
（や…やめろおおお  
これ以上はやめてくれええ！）」

よるいち





ほん  
ほん

ほん  
ほん

「ほおおおおーッ！ぶおおおお！  
（おおッ♡おおッ♡  
や、やめ…やめてくれええ♡）」

よるいち



「ふんツ♡ふんツ♡  
どうだい夜一ちゃん  
もう限界かな♡」

「んつぶおおお!ふんつぶおお!

(もうっ♡やめてくれえ♡)

ご、降参♡降参じやああああ♡)」

「やめて欲しい?もう降参なの?」

どうしようかな〜!夜一ちゃんが

正式に僕の性奴隷になるなら

止めてあげるよ」

乱菊の放屁に媚薬効果も含まれているらしく

もはや激臭すら快楽と化してしまい

頭から尻まで気が狂うほどの快楽に、覆われ

夜一はあつさり負けを認めてしまった…

よるいち



「夜一ちゃん♡」

降参するの早すぎだよ♡

死神では手練れのようにだけど

全然大したことないんだね♡」

「う……うう……」

す……すまぬ……乱菊……

う……！うぷツ！」

せっかくの解放されるチャンスを

快樂に負け放棄してしまった夜一は

乱菊への謝罪をするとともに

肺と胃に充滿した淫放屁を

下品な噫気として放出した……

「うひひ……♡」

約束通り夜一ちゃんには

僕専用の性奴隷になつて

もらうからね♡」

「……く……くそお……！」

す、好きにするがいい……」

「じゃあ早速♡ご主人様は

射精してもよおしてきたから

『便所』に用を足そうかな♡」

んええええッ





「あ……♡ああ♡

ごごご主人様……どうぞ

ご主人様専用の便所に

小便を……お恵み下さい……♡」

降参し約束を受け入れてしまった夜一は  
その身で便所の役目を果たすのだった……





# BUHICH

〜 皇鮫后 屈辱の淫尿調教〜



前回、夜一は男との勝負に負け

正式に性奴隷となることを宣言させられてしまう…

それからは自分よりも戦闘能力の劣る男の

完全な傀儡と化し下劣な性奉仕をさせられる日々が  
続いていた…


また、乱菊は一時的に尸魂界へ戻ることを

許されているが、体内にとある薬品と監視用の菌を  
投与され、男に不都合な行動は一切制限されていた。

その薬品はいつでも男の意思で鎖結と魄睡を

破壊することができ、死神の力を失うことを恐れた  
乱菊は都合の良い時にだけ呼び出される売女の  
ような扱いを受けていた…





そして、時は流れ数カ月程経ったころ…  
虚圏から大きな霊圧がたびたび消えるという  
事態が起きていた…



その頃、現世では…

「…フフフ♡」

予定通りじやの!♡ご主人様♡」

妖艶な笑みを浮かべ、かつては不倶戴天の仇とも  
思えるほどに嫌悪していた男を主人と呼び  
コスチュームも男の精液や得体のしれない汚れ  
自身の体液で汚れひどい悪臭を放っていた…



いつたいこの数ヶ月でどのような行為をすれば  
ここまで墮落してしまうのか…

そこにかつて『瞬神』と呼ばれた彼女の姿は最早  
存在していなかった…



「うひひひ…本当によくやってくれたね夜二♡  
また新しい女の子が手に入って嬉しいよ♡」  
「…全く、儂というものがありませんながら次々と  
新たなおなごを調教したいとは…ご主人様は  
本当に助平じやのお♡」

「そろそろ着替え終わったかな♡  
おいで新人のポインちゃん♡」





「…クッ！」

このような屈辱…！

お前達…絶対に許さん…！」



男に呼ばれピチピチのスクール水着を纏い  
用務員室に入ってきたのは、かつて

十刃と呼ばれる一団のNo.3、ティア・ハリベル  
今では虚圏を統べる力を持つ彼女だが

従属官と呼ばれる部下を夜一に人質に取られ  
現在は男の言いなりとなってしまうた…

「うひひひ…♡初めは皆そう言うけれど、

キミも喜んでボクのチンポにしゃぶりつくように  
してあげるからね♡

今日は特別な用意があるから墓所を変えるよ♡」



男に連れられハリベルと夜二がやってきたのは  
校内の目立たない場所にある男子トイレだった…  
一応掃除はされているようだが、便器からはみ出た  
小便の飛沫により特有のアンモニア臭が漂っていた…



「…ウウツ！  
こんな薄汚い場所でいったい  
何をするつもりだ！」

「うひひ…♡せっかくスク水を着ているんだから  
水泳でもしてもらいたいところだけど…  
まずは準備運動からしないとね♡  
ボクの指示通りに運動するんだ！」



「…な…ハイ…レグ…だと…

…くそツ!

ほ…ほら!これでいいのだろうツ!

男にスクール水着をハイレグにするよう命じられ  
嫌々、自らの股布を持ち上げ食いこませる  
ハイレグにしたことで処理をしていない陰毛が  
露わとなりハリベルは顔を赤く染める

「ククク…♡答えられぬ羞恥じやろう♡  
ご主人様に恥をかかされる快感はたまらぬ  
からの♡」

「フヒフヒ♡ハリベルちゃんのような

クールな美人がみつともない真似をするのは

最高に興奮するよ♡

でも、もっと楽しまなきやだめだよ!

笑ってごらん♡にっこりスマイルだよ♡」





「…くっ！(これもアパッチ、スンスン、ミラ・ローズのため…)」  
「…エ…エへへ…！ど…どうぞハリベルの食い込み  
ハイレグオマンコ♡ご覧くださ〜い♡」

人質にされている自分の部下がどんな目に  
あわされるか…そう思うと彼女は逆らえず  
まるで男に媚びを売る淫売のように  
股を広げ笑顔を作った…

「すごく素敵だよハリベルちゃん♡  
可愛いキミの笑顔でもうチンポ  
ビンビンだよ♡  
その調子で次は『豚さん』になって  
腰を振って踊ってごらん♡」

「ああ♡羨ましい♡  
ご主人様♡あとで儂にも  
ハイレグ調教を  
たのむ♡」

ハリベルの痴態を見て  
興奮したのか  
夜二は小便器に顔を近づけ、  
アンモニア臭を嗅ぎながら  
自らの性器を愛撫している…



「…ぶ…ぶっひい…ん♡ハリベルはハイレグ豚あ♡

フゴツ…♡フゴツ♡ぶひひいん♡

腰をフリフリ♡ドスケベダンスで

オチンポビンビンにしてえ…ん♡」

指で鼻を持ち上げ豚の真似をし

腰を振って無様に踊る

彼女に最早三十刃の威厳は

無かった…

「うひひ♡す、素晴らしいよハリベルちゃん♡

肉便器の素質は十分あるよ♡

じゃあフィニッシュを決めてごらん♡」

はりべる

ぶひい♡

ぶひい♡









「…ウウツ…これは…!」

追加で用意された衣装はハリベルが普段着ている服の首回りを切り取ったようなものだった…

それを着用し男子便器に座るよう言われ仕方なくそれに従った…

「なにを…しようというのだ…

い…いい加減にしろ!私はその気になればお前など…!」

「おつと…怖い怖い!

まあ例えキミが暴れてもここに居る夜一は

相当の手練れ、しかもボクにはもう一人乱菊という肉便器が

いるからね♡キミの部下がキミ以上にひどい仕打ちを受けても知らないよ♡」





「た…頼む…あの3人には手を出さないでくれ…  
済まない…か…代わりに私が全て引き受けよう…!!」

「そうそう♡それでいいんだ♡  
ほら笑顔が消えてるよ!  
笑って笑って♡」

「エ…エへへ…♡…♡ごめんなさ…♡  
ハリベルはどんな変態行為もします♡」  
「うひひ…♡実はねキミの部下の  
3人からプレゼントがあるんだ♡」

「…プレゼント…? わ…わ…♡  
とっても嬉しいです♡」





男と夜一は怪しげな器具を用意すると

そこから延びるチューブをハリベルの衣装に  
付いている穴に装着した…

「な…なんなのだ、これは…?」

「よし♡こちらも準備完了じゃ!

いつでもよいぞ♡ご主人様♡」

「うひひ…♡キミの部下の3人が

今日のために『小便』をたくさん用意して

くれたからね♡

今日はそのプレゼントをキミに『味わって』貰おうと

思ってたね♡」





「な…しよ…小便…だと…!!  
ま…待て…待って…くれ…!!」

プレゼントが碌な物ではないことは  
想像していたが、3人の小便だとは思わず  
意表を突かれた彼女の制止も叶わず  
チューブを伝わり3人分の尿が流れ込む…





「待て…頼む…！待ってくれええ！

酷い臭いだっ…！頼む！やめてくれえツ！

熟成されてアンモニア臭が酷過ぎるのだツ！

こんなのを浴びたら…頼む…やめてくれえ！」

チューブから先に伝わる尿の激臭で

早くも音を上げてしまうハリベル…

迫りくる汚水への恐怖に怯える彼女に

戦士のプライドなど、とうに無くなっていた…





「やめッ……うッ……！」

ぐええええええええ

ッ！」

ハリベルの決死の懇願も虚しく

アパッチ、スンスン、ミラ・ローズの3人の

貯め込まれた大量の尿が一気にハリベルの

美しい顔を容赦なく汚していく……

ばしやあ





「ぶちぶちぶちーッ！」

「ぼぼッーッ！ぼぼろッ！」

「く…クソッ…何て下劣なッ！」

「…このままでは尿で溺れてしまう…ッ！」



「うひひ…♡酷い臭いだなあ♡」

「言っておくけど、一滴でもこぼしたら」

「キミの部下にプレゼントを返さなきゃいけないからね♡」

「さあ♡キミの部下からのプレゼント存分に味じわってね♡」

「むがッ！ぼぼ…！」

「なん…だと…こんなにくさい尿を一滴もこぼさず…だと…！」

「ぼぼぼぼぼ」

「ぼお」





「ぐええーッ！ぐ…ぐぞおおお！」

「ごぼごぼッ！ごきゅッ！ごきゅッ！」

「うあああ！ひ…酷い味だ！」

「ホラホラ！笑顔を忘れてるよハリベルちゃん♡」

「ぐえぼろろッ！げべえげべえッ！」

酷い臭いの汚水を必死の笑顔で

飲み始めるハリベル酷い刺激臭が

口内から胃までを支配し、それでも彼女は

部下のために尿を啜り続ける…

ごぼごぼごぼ

ごぼ





「頑張り屋さんのハリベルちゃんのために  
鼻からも味わえるようにしてあげるからね♡」

「んがあッ！ぶひよろろろッ！

(なッ…！何をするのだッ…！)

こ…こんなの惨めすぎる…！)

男は追い打ちをかけるように

ハリベルに無様な鼻フックを装着し

更に大きく広がった鼻の穴へ細い

チューブを挿入した…





「ハリベルちゃんがすごく美味しそうに  
飲むからボクが追加してあげるよ♡」

「わ、僕も♡ご主人様と連れションしたいのじゃ♡  
あん♡出るう♡」

尿意を催した二人はハリベルを  
小便器に見立て容赦なく排尿して  
しまう…





——数時間後、ハリベルはやっとすべての尿を飲み干した…  
鼻からは黄ばんだ鼻水が溢れ…彼女は完全に呆けてしまっていた…

「ほら♡ハリベルちゃん♡」

何か言うことがあるんじゃないのかい♡」

「ふんげええ…♡ぶひい…♡」

「は…はい…言います…♡」





「んげんNONNONNONおお~~~~」

「いっ……いっやんやんわおどっだあ♡」





「おっおお…♡

で…出りゅううう♡

しよ…小便…出りゅうう♡

そして大量の小便を飲み干したハリベル自身も  
無様に小便を漏らしちゃった…

